池田重人[1]：報告－第 41 回日本植生史学会談話会
Shigeto Ikeda[1]: Report—The 41st forum of the Japanese Association of Historical Botany

2016 年 5 月 28, 29 日に標記の談話会が開催された。テーマは「西中国山地の温帯林と三瓶火山活動に伴う埋没林」で，車で移動しながら島根県内の各所を巡った。参加者は，案内役である文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳さんと島根県立三瓶自然館の井上雅仁さんを含めて 6 名であった（図 1）。

初日の朝，津和野駅前から渡辺さん運転の車に乗り込み，まず「安蔵寺山（あぞうじさん）のブナ林」をめざして出発した。安蔵寺山（1263 m）は津和野の南東にあり，西中国山地屈指のブナ天然林がみられるという。林道に入ると山腹に天然スギらしい樹冠がぽつぽつと見えはじめ，しばらく行くと安蔵寺トンネル手前の登山入口に着いた。ここはもう標高 1000 m で，登りはじめるとすぐに主尾根となった。あとは緩やかな登り下りの快適な道が続いており，時間の制約がなければ頂上まで行くのも大変ではなさそうである。しかし，井上さんの解説を聞いたり写真撮影などに忙しく，歩みは遅い。ブナ天然林とはいえ尾根道の周囲ではブナはそれほどみられず，天然生のスギが多い印象を受けた。スギも大径のものは少なく，人の手は入っているようである。ミズナラ（図 2）やオオウラジロノキの大木に感嘆し，同所的に生育するチマキザサとチュウゴクザサの違いなど，いろいろと観察しているうちに時間切れとなった。予想どおり途中で引き返すことにはなったが，この地域の自然植生の一端を垣間見ることができた。

次は県南西端の吉賀町にある六日市コウヤマキ林を見る。コウヤマキの自生地といえば，高野山など紀伊半島中央部や四国，木曽などを思い浮かべるが，中国地方でも広島県西部の山間などに少数みられる。六日市の林分はこれらに連なる位置にあり，島根県内では唯一の分布地となっている。休憩室を兼ねたコウヤマキの展示室「コウヤマキギャラリー」で昼食の弁当を食べる。コウヤマキ林は中国自動車道を越えてすぐのところなので，ここから歩いて行った。ずいぶん人里近いところにある。登るにつれてコウヤマキが現れ，次第にその密度を増してゆく（図 3）。尾根に着く頃には純林状を呈し，林床に稚樹が密生しているところも

図 1　談話会の参加者（安蔵寺山）（高原光氏撮影）.

図 2　安蔵寺山の大ミズナラの前で（高原光氏撮影）.

図 3　六日市のコウヤマキ林.

©2016 Japanese Association of Historical Botany

図 4　ハンノキ林の下にミツガシワなど湿地性植物が生育する赤名湿地.

ある。樹高はそれなりに高いが大径木はみられず，人為的な影響はかなりあるように感じた。

島根県は東西に長い。ここからは高速道路を使って広島県北東部の三好まで行き，北上して三瓶山方面に向かう。本日最後の見学地である島根県飯南町の赤名湿地に着いたのはもう 5 時頃であった。ここにはハンノキ林の下にミツガシワの群落があり，ほかにも多数の湿地性の植物を観察することができた（図 4）。奥には湿地につながる長尾池という人工的に作られたため池があるが，ここにもミツガシワが大繁殖しているのを見ていると，「氷河期の生き残り」などといわれていることが少し奇妙な気がした。

二日目はまず三瓶山（島根県大田市）に登る。三瓶自然館から名号登山道を経て主峰の男三瓶山（1126 m）へのコースをとった。はじめは麓をめぐる落葉広葉樹林の散歩道のようである。山の上部はブナが生育するが，下部にはシデ類が多い。下層ではゴマギやハナイカダなどが多くみられる。久しぶりにみるタンナサワフタギや，初めてみるガガイモの仲間ツクシガシワなどもあり，井上さんの解説を聞き写真撮影をしているとなかなか前に進まない。今日も頂上は無理かと思い始めたころ，傾斜が急になるとともになぜか皆の登るスピードが増してきた。登るにつれて次第にガスが濃くなる。意外に早く山頂に着いたが，残念ながら全く展望はきかない。風も強いので山頂からは早々に退散する。北へコースをとり，イヌシデの林（図 5）を通って三瓶自然館へ下る頃には雨が降り始めた。

昼食後，三瓶自然館の中を見学する。島根県の自然に関して充実した展示があるようだが，今日は新館の埋没林展示の見学が中心である。新館に入ると，階段付近の壁いっぱいに広がる見事な三瓶西の原露頭のはぎ取り展示が目に入る（図 6）。これは三瓶火山の活動により堆積した何層も

図 5　三瓶山からイヌシデ林の中を下る.

図 6　三瓶自然館新館の露頭はぎとり展示（部分）.

図 7　三瓶小豆原埋没林公園地下展示室の巨大埋没スギ.

図 8　三瓶小豆原埋没林公園地下展示室に横たわる樹木群.

の火山噴出物で，16,000 年前以降の 4 回の活動による層が示されているという。埋没林展示室に進む。天井を抜いて 2 階から 4 階までを使い，約 4000 年前の三瓶山噴火に伴い埋まった高さ 10 m の埋没木と根張りを含む根元部分の埋没木が展示されている。これを見ていると，生育していた当時のスギ林の姿が浮かんでくる。さらに，三瓶小豆原埋没林公園へ車で移動する。この地下にある展示はやはり圧巻であった。直径 2 m超のスギをはじめとする埋没木が立ち並び（図 7），かつての地表にはさらに多数の樹木が横たわっている（図 8）。渡辺さんの話では，見やすい展示のために，これでも地表の樹木はかなり除かれているという。かつてこの一帯にはどんな森林があったのかと，想像するだけでわくわくする。この迫力は写真ではなかなか伝わらない。未見の方はぜひ一度訪ねていただきたい。

この後，出雲市佐田町にある横見埋没林を見学した。これは三瓶小豆原埋没林とは異なり，三瓶雲南テフラ SUn（パンフレットの記載では 7 万年前）に埋まったものである。シナノキやカエデなど 22 本の樹木が確認されており，規模は小さいものの，当時の植生を示す資料としてとても興味深いものといえる。以上で見学の行程を終え解散した。

井上さんと渡辺さんには現地での丁寧な解説を，また渡辺さんには一人で全行程の運転をしていただいた。談話会を企画された方も含め，皆様に感謝いたします。この学会の巡検は魅力ある企画が多いのでよく参加しているが，今回は現地を熟知した方の案内がいかに大事であるか，改めて認識し直した。それだけに，もっと多くの人の参加があれば，談話会はさらに有意義なものになると思った。

([1] 〒 305-8687　茨城県つくば市松の里 1　森林総合研究所立地環境研究領域)